

2015年6月9日(火)

驚くばかりの恩恵

川崎 司

~「ああ、そうか」と言える自分に~

神はこう言われる、「わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救いの日にあなたを助けた」。
見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である。〔コリント人への第二の手紙 第6章2節〕

アメイジング・グレイス

作詞：J. Newton

作曲：不祥

Amazing grace! How sweet the sound!
That saved a wretch like me!
I once was lost, but now I am found;
Was blind, but now I see.

'Twas grace that taught my heart to fear,
And grace my fears relieved;
How precious did that grace appear!
The hour I first believed.

Amazing grace! How sweet the sound!
That saved a wretch like me!
I once was lost, but now I am found;
Was blind, but now I see.

いよいよ私にも、聖学院という学び舎での越し方を振り返る〈今〉がやってきました。この岐路に立って行く先を見定めようとする時、私は私なりの決断をしなければならぬでしょう。より豊かな成長を願い決断する機会は、これから何かが始まろうとする動的な〈今〉でなければなりません。

「あなたは今、どんなことを考えているのですか？」との問いに対する答えは〈今〉の自分の姿をかいま見せ、「ああ、そうか」という気づきに恵まれることでしょう。自分の人生に「ああ、そうか」と言える〈今〉をひとつで

ももっている人は幸せです。この学校での十数年を思い起こす時、集まり散じた皆さんの先輩ひとりひとりのことが懐かしく浮かんできます。そこには私に遺してくれた多くの〈今〉が鮮やかに刻まれています。それは、これから長い長い旅へと出掛ける修業者の覚悟のようでもあります。そのほんの一部を紹介しておきましょう。

◇ “自分の生きている現在を肯定的に見ることができる人は幸せだ。” “〈命〉という言葉がなければ何もなくなってしまう。” まどさんのこの二つの言葉に、私は生きることの喜びを感じました。（『ふしぎがり〜まど・みちお 百歳の詩〜』）

◇ トヨさんの詩は、被災した方々の心を包み込む深い愛情にあふれている。それは逆境を乗り越える光明となり、復興へと歩み出す原動力となるだろう。（『“不幸の津波に負けないで、100歳の詩人 柴田トヨ』）

◇ 彼らは聖書の言葉に影響を受けその言葉を心に刻み、自分のなすべき使命を果たしました。激動の中で基督教と出会い、それを人生の指針として生き抜いた姿を眩しく思いました。（『聖書を読んだサムライたち〜龍馬をめぐる五人の男たち〜』）

◇ 一地方で起きた騒動が時の内閣を総辞職させたことに驚かされた。戦争による米価の高騰によって大きな格差が生まれた経緯を知ることができた。「力なきものの力の集まり」こそ真の力だと感じた。（『大正テモクラシーを生んだ〈米騒動〉』）

◇ 母セキさんの貧しい人々を助ける姿が印象的でした。弱い立場から社会を告発した「蟹工船」は、お母さんあつての作品でした。多喜二の遺体に寄り添う母親の姿に目頭が熱くなりました。（『小林多喜二のメッセージ』）

◇ 賀川さんは〈隣人愛〉の精神を持っていた人です。スラム街での生活は決して楽なものではなかったと思いますが、そこから逃げ出すことはせず伝道に励んだ賀川さんは、優しい人というだけでなく、とても強い人だと思いました。プリンストン神学校へ留学し、帰国後は社会運動を始め、貧困を根本から救おうと尽力した賀川さんは、キリストの教えの下、反戦を唱え、平和を願う人でもありました。賀川さんは常に〈愛〉をもって人のため世のために生涯を捧げた素晴らしい人物でした。（『死戦を越えて 賀川豊彦物語』）

◇ 私たちは近くの人にさえ目を向けることができていない。自分自身にすらできていないかもしれない。人に何かできることがあるとすれば、まず他人に関心を示すことだ。（『みんなのおかあさん マザー・テレサ』）

◇ “愛は自分の命をさしだすこと。”という言葉聞いて‘はっ’としました。私にはとてもできませんが、もう少し周りの人に優しくできたらいいなと思いました。（『塩狩峠』）

◇ “本当にダメな人なんて神様は創らない。”という言葉が心に響きました。この言葉を憶えて、自分をまた人を見下してしまうことがないようにしたいと思いました。（『三浦綾子の足跡』）

◇ 聖学院のチャペルで、日野原先生の“感謝することは幸せに繋がる。”というお話を聞いて以来、〈感謝〉という言葉が自分の中で特別なものになりました。〈感謝〉はする側にもされる側にも特別な行為であることを再認識させられました。（『日野原重明 100歳 いのちのメッセージ』）

◇ 運命に逆らうことはいつの時代でも難しい。未来を諦めることを納得させられることは悲しい。そんなことが繰り返される社会にあって、何もできない自分が歯痒く悔しい。（『雨の神宮外苑〜学徒出陣 56年目の証言』）

◇ ‘家族が安心して生活できるように’という女性の強い意思があったからこそ多くの共感を集めることができた。

女性たちから始まった小さな活動が世界の潮流を変えた事実にも勇気をもたらした。(『3000万の署名 大國を揺るがす～第五福竜丸が伝えた核の恐怖～』)

◇人は避けようもなく死ぬのだ。当然その死を悼む人のため「死を司る職」が必要になる。それを誇りに思う人を否定できようはずもない。それこそ死に対する冒瀆だ。彼らに敬意を抱き続けたい。(『おくりびと』)

◇人の心情を慮り世のため人のために生きたところ、自然と人間が共生する社会をつくらうとしたところに、大きな感銘をおぼえた。(『赤貧洗うがごとき～田中正造と野に叫ぶ人々～』)

◇生れながらの地位や身分に関係なくそれぞれの持ち場で力を発揮させ、皆が一体となって世の中を変えようとしたところ、先が見えない状況に陥った時でも懸命になって前を向いて歩いていこうとしたところに、吉田松陰の魅力を感じた。(『蒼天の夢～松陰と晋作・新世紀への挑戦～』)

◇〈平和〉という理想を掲げ、誠実な品格をもって心を開き、東洋と西洋の懸け橋となった二人の生き方は、日本の教育の土台を構築することになった。(『東と西をつなぐ～内村鑑三と新渡戸稲造～』)

◇木下監督は、庶民の細やかな幸せを願う気持ちを大事に、〈戦争〉ときちんと向き合っただけでその悲惨な事実を伝えたいと思っていた。高度経済成長の時代にあってもその意思を決して曲げなかった。懸命に生きる人たちの強さ優しさは、どんなに時代が変化しても決して壊してはならないものだった。(『愛と怒りと～映画監督・木下恵介～』)

皆さんに励まされ続けるという恵みに温かく包まれた歳月にこころから感謝したいと思います。

最後に、賛美歌【アメイジング・グレイス】(驚くばかりの恩恵)に耳を傾け、恵みの時・救いの日を心静かに希求しましょう。

この曲はもとは黒人の奴隷たちが、過酷な労働や差別などの苦悩から解放されたいという願いを胸に歌い継いできたのだそうです。ところが18世紀にこの詞を書いたジョン・ニュートンという英国人は、かつて奴隷船の船長だった人でした。奴隷を虐げたほうの人間だったのです。それがのちに牧師となり、過去の罪を悔いて神に許しを乞い、この歴史的な作品を生んだのでした。

お祈りします。

敬愛する神様。誰もが「ああ、そうか」と思える自分に気づかせてくださいますように。〈今〉という救いの日をお恵みくださいますように。 アーメン